

「洗礼を受けませんか」

主任司祭 晴佐久昌英

カトリック教会には、一般的な「成人洗礼」の他に、古くから大切にされてきた三つの洗礼がある。「幼児洗礼」「臨終洗礼」「のぞみの洗礼」である。これらは、まさにこれぞカトリック、ともいうべき尊い洗礼である。

幼児洗礼には、本人の意思は不要だ。なにしろ赤ん坊である。いかなる準備も勉強も、信仰告白すら不要だ。むしろ親の信仰と成長してからの勉強が前提だが、いずれ受け直す必要がある条件付き洗礼というわけではない。むしろ、あらゆる人間側の条件を越えた、神の無条件の愛の世界へ生まれるという洗礼の本質を美しく表す本来的な洗礼だといってもいい。そもそもすべての人は神の子であって、洗礼は親である神の親心によってのみ成り立つのであり、自分で決心しているつもりの成人洗礼ですら、実は神から見れば幼児洗礼にすぎないのだから。

臨終洗礼には、本人の努力は不要だ。なにしろ臨終である。何も言えず、何もできず、時間の余裕もない。そのため、居合わせた人ならたとえ信者でなくとも、定められた簡単な言葉と印によって洗礼を授けることができる。しかしその生死の極みの洗礼こそは、実に洗礼らしい洗礼だといえるだろう。すべての人はやがて死という産道をくぐって神の世界へ生まれ出るのであり、洗礼はその先取りだからだ。その意味では、すべての洗礼は臨終洗礼なのだろう。

のぞみの洗礼とは、本人が心から望んでいるならばもうすでに洗礼を受けているのだという信仰である。だからたとえ不慮の死を迎えてもその人はすでに信者なのだ、というわけだが、これに至っては人間側のいかなる基準も無効となる究極の洗礼だろう。誰だって心から救われたいと望んでいる以上、実はすべての人はすでにのぞみの洗礼を受けているのではないか。

「私には洗礼を受ける資格がない、信者にふさわしくない」などという人がいる。しかし、「資格」とか「ふさわしい」という言葉ほど洗礼になじまないものはない。むしろ洗礼は、そのような人間的基準をリセットして、神のいのちの世界へ解放される新たな誕生なのだ。あなたも洗礼を受けませんか。